水不足を体験して

茨城県　常陸太田市立北中学校
三年　海老根　拓　馬

ほとんど雨の降らない、乾燥した地域が国土の半分以上に広がっている国、オーストラリア。僕は去年そこへ研修に行った。そこで学んだ事は英語はもちろんだが、それだけではなかった。普段の生活を支えている水。その水という存在を見つめ直すとてもよい機会となった。

初日、ホテルに着いて手を洗おうと蛇口を回した。そこで目にした光景は、日本に住んでいる僕にとっては信じられない光景だった。水が薄茶色に濁り、小さな浮遊物がたくさん浮いていたのである。そのような話は研修前に少しは聞いていたが、ここまで濁っているとは思ってもいなかった。その日は、もしものためと買っておいた水を少しずつ大切に飲んだ。蛇口をひねれば、きれいに澄んだ水がジャバジャバ出てくるという本当に幸せなことを、当たり前だと思っていたということに気付かされた。その時、今までそれに気付かなかった自分が恥ずかしくなってきたのを、今でも覚えている。

その後シャワーを浴びていた時、シャワーが急に冷たくなり、水がチョロチョロしか出なくなってしまった。そのような事は日本ではまずないだろう。僕はその時、ガイドさんに言われたある事を思いだした。それは「オーストラリアでは水が貴重だから、シャワーは十分間ですよ。長く使いすぎるとお湯が冷たくなりますからね。」という事だ。その時僕は、ただ大げさに言っているだけだろうと思い込んで軽く聞き流していた。しかし、それが今実際に起こったのだ。なんだか自分にポッカリと穴があいているような気がした。

その夜、僕は少し水について真剣に考えていた。水なんていくらでも出てくると思い込んでいた僕。ニュースの特集で水が足りない国がたくさんあり、雨水を貯めて飲んでいる国もあるという話は何度も聞いていた。しかし、それが自分の事ではないと軽くしか受け止めていなかったのかもしれない。そのような事を考えながら、僕の頭の中では、オーストラリアの人々が肩を寄せ合って水を大切に使っている姿が何度も浮かんできた。そして水に対する意識が変わっていったのも、この出来事からだったと思う。

日本に帰って、水道の水で手を洗った。自分でもなぜだか分からないが、気持ちよくて嬉しかった。そんな当たり前のことなのに、と思う人もいるかもしれない。しかし、水資源の足りないオーストラリアを訪れてきた一人として感じたことは、日本という水資源の豊富な所に生まれたことは、本当に幸せなことだということである。しかし、自分の住んでいる国が水資源に恵まれているからよかった、安心だと感じるだけで終わってしまっては、僕のオーストラリア研修は意味がないと思う。水という観点から世界の人々にも目を向けていきたい、目を向けていかなければならない。そういう思いを持っていれば、水に対する意識も変わり、水の無駄づかいもなくなるだろう。

今、オーストラリアでは長い間雨が降らず、地面が干上がってしまう大干ばつに見舞われていることをテレビで知った。その時、頭に自然に浮かんできたのは、あの夜の時のように、オーストラリアの人々が肩を寄せ合って水を大切に使っている姿だった。

僕の将来の夢は学校の先生になることである。そしてオーストラリアで肌で感じてきた水の大切さを生徒に伝えていき、一人でも多くの生徒が、水についてもう一度見つめ直せるような機会をつくってあげたいと思っている。

いつも何気なく目にしている水。しかし、僕達の命やよりよい生活を陰で支えている水。そのようなすばらしい資源「水」を後世に伝えていくのは、僕達の大切な役割だと思う。

イラクの子供から学んだこと

栃木県　栃木市立栃木南中学校
三年　森戸千浩

「川の絵を描きなさい。」そう言われたら、あなたは何色で色を塗るだろうか。おそらく、水色や白などの明るい、澄んだ色であろう。私ももちろんそのような色で塗る。それは、世界共通のことであると私は思っていた。しかし、私の考えは、美術館で出会った一枚の絵によって覆されたのだ。

それは、昨年の夏。私は友人と世界の子供達がテーマの展覧会を見に行った。それぞれの絵が日本にはない文化をとらえていて素晴らしいものだった。しかし、ある一枚の絵の前で私の足は動かなくなってしまった。その絵はイラクの子供が川で笑顔で遊んでいるもの。日本でもよくある風景だが、明らかに様子が違っていた。子供達が楽しそうに遊んでいる川の色は、赤みがかった茶色であったのだ。私ははじめ、その絵が川で遊んでいる子供の絵とは全く考えもしなかった。しかし、タイトルに「川遊び」と書いてあったのを見て、ようやくわかったのだ。わかったと同時に私は胸が締めつけられる思いをした。いつでもどこでも、澄んだ水が飲めると思っていた自分に腹が立った。

そもそも水とは何だろう。当たり前すぎて考えなかったことを私は考えてみることにした。簡単なようでなかなかわからない答え。しかし、私達生命体が成長するのに必要なものということは前からも知っていたが、今改めて確認した。命あるもの全てに水は必要なのだ。しかし、世界には水を求めて死んでいく人がいるのが現状であり、逆に日本などの先進国はいつでも澄んだ水を使えるのも現状だ。同じ地球という惑星に住んでいるのに、こんな違いがあってはならないと私は強く思った。

とはいえ、私達は水の貴重さを忘れているような気がする。私はいつも母に「水がもったいない。止めなさい。」と言われ、心の中で反抗することが多々あった。いつでも水が使えるのにどうしてこんなにうるさく言われなくてはならないのか、不思議にも思った。しかし、あの絵を見てから私はよく考える。もし、蛇口をひねった時、あの茶色い水が出てきたらどうしよう？一滴も水が出てこなかったらどうなるの？と。私は今までの水の使い方に対して反省した。朝起きてから就寝までの全てにおいて私のそばにある水。しかし、蛇口をひねれば水が出ること、それは奇跡なのだ。水は大切にしなければと思い、私は台所の水の蛇口を無意識のうちにキュッとしめていた。あの絵を描いた子供の為に、そして世界中の水を求めている人の為に。

しかし、私一人が努力したからといって世界に澄んだ水を届けることは、きっと不可能に近いのだろう。なんとも言えない怒りがこみ上げてきた。どうしたらいいのか、母に尋ねると、母から返ってきた答えは意外にも簡単なものだった。

「その気持ち、みんなに伝えてみたら？」

私ははっとした。今まで一緒に歯みがきをしている友達が水を出しっぱなしでも何も言わなかった。友達が水をしっかり止めていなくても注意しなかった。これからは少しでももったいないと思ったら、それを注意していこうと思う。

「便利な世の中になったなぁ。」祖父は最近、よくこう嘆く。それと同時に限りある資源を無限のものだと勘違いすることが多くなった。そんな今だからこそ、私は今まで以上に水を大切にしていかなければならないと思う。私はイラクの子供から、水の大切さを学んだ。まだ中学生である私がイラクの子供の為にできることは少ないかもしれないが、できることからやってみようと思う。そして、私が大人になったら、未来はこうあってほしいと願う。そう、イラクの子供、世界中の人々が澄んだ水を口にすることができる未来を――。

自然と共に生きる未来を信じて

群馬県　群馬大学教育学部附属中学校
三年　田村洋貴

僕の家から学校までの道のりは、一〇キロもある。うだるような暑さの中、目もあけられない北風の中も、ただひたすら一心不乱にペダルをこぎ続ける。今年で三年目になるが、今だに朝は、辛くてたまらない。「よし、今日もセーフだ。」自転車を置き僕が、まずすることは、水道の蛇口をひねり、水を飲むことだ。水は、朝日を浴びてキラキラ光り、小さな弧を描く。水は、カラカラになった僕の喉を通り、「ゴクリ」と音をたて体を一巡する。「ふぅー」と息をつくと、水は、静かに体の奥へ落ちていく。これは、いつの間にか、入学以来、僕の朝の儀式となってしまった。そして、学校の一日が始まる。

学校は、自販機もなければ、冷蔵庫から、取り出す、ミネラルウォーターもない。だから、飲み水としての水道水を、一番身近に感じる。特に夏の炎天下、運動した後に、がぶりつくように飲む水は最高だ。それから、蛇口を全開にして、頭から水をかぶり、僕は、犬のように頭をぶるぶると振るわせ、ついつい友達とふざけ合ってしまう。僕は、こんな時、ちょっとだけ胸が痛むことがある。たったバケツ一杯の水を求め、裸足で歩き回る、少年や少女たちの姿だ。そして、その水が、安全だと限らないこと。水を飲めずに、死んでいく人がいて、その水を飲んで、死んでいく人がいる。という世界の現実が、頭をかすめる。

蛇口をひねれば、処理された水が、飲めるということは、取りも直さず、一番自然に恵まれた、幸せな生活だと思う。だが、学校から出ると、その考えが揺いでしまう。町は、自販機であふれ、スーパーには、所狭しと、ミネラルウォーターが並んでいる。この間、「アルプスの水」の隣りに「アラブ首長国連邦の水」を見つけ驚いた。「前橋の水は、地下水だから、おいしい」と言っていた我家でも、いつの間にか、水道水は、生活用水へ変わり、ミネラルウォーターが、飲料水になった。お金さえあれば、おいしく、安全な水を買い占め、水を無尽蔵に使い続ける。そして、その生活を清潔で、快適な暮しだと信じ、自慢し合う。水は、自然の恩恵なのだから、もっと平等であっていいはずだ。

僕の家の近くに、小さな小さな小川がある。春は、メダカが泳ぎ、夏は、足を入れると、ひんやり気持ちよかった。秋は、落ち葉をのけると、小さな魚が、石の影にいた。冬は、すき透った薄い氷を石で割るのが、おもしろかった。ある日、寄り道をして行ってみた。川の水は、どす黒く、よどみ、ペットボトルやゴミが散乱していた。たった十数年なのに、すっかり変わってしまった小川に、僕は、言葉を失った。人間の身勝手な行動一つ一つが、重なって、こんな小さな小さな小川の生活圏までが、壊されてしまったのだ。水は、人間だけでなく、身の周りに暮す全ての生物にとって大切な命のよりどころだ。

僕の祖母は、コップに残った水さえ、当り前のように植物に与える。今まで、ケチ臭いと思いながら見ていたが、このさりげない行動こそが、水を大切に思う第一歩だと思う。祖母のように、毎日の生活の中で、できることは、たくさんあると思う。水を使い汚すのも人間だが、知恵や知識を使い、水をもっときれいにできるのも、人間だ。僕は、自然と共に生きる知恵を身に付けた大人になりたい。いろいろな犠牲を払ってまで、豊かな生活を手に入れたいとは、思わない。そのためにも今できることを、毎日の生活の中で一つ一つ実行していきたい。何年かかるか分からないが、僕の大好きだった小川がもとに戻ることをあきらめず信じていたい。

水に感謝し、水を意識する

千葉県　松戸市立第五中学校
二年　吉　次　由美子

地球と他の惑星の違いを調べていた時、改めて地球が水の惑星であり、水は全ての生命の源であることを強く認識した。

水は、川から海へ流れ、やがて大気となり、雨となって、また地上に降り注ぐ。この、水を始めとした循環システムが、もしも地球上で機能しなければ、私たちの生活は混乱し、生きてはいけないだろう。

同じ太陽系の惑星でありながら、地球の隣の金星は、地球よりも太陽に近いことから地表面の温度は四七〇度にも達する。そのため、水はなく、乾燥した大気に覆われている。とてもこの条件では、地球上のいかなる生物も生存できない。

しかし、水の惑星といわれるこの地球も、近年、深刻な水不足という事態に陥っている。異常気象による影響もあるが、よく調べてみると、世界の国々では、「水の事情」が全く違うことが分かった。

私たちが暮らす日本では、どこの家庭でも蛇口をひねればきれいな水が勢いよく出てくる。毎日お風呂にも入ることができるし、夏にはプールもある。もしも断水になればニュースになってしまう程、いつでも水が使えて当たり前の社会である。

ところが世界に目を向けると、水道の設備が整っていない国が、未だにたくさんあることが分かった。これらの国では、水を得るために大変な労力を費やしたり、時には危険な目に遭いながら水を手に入れている。中には、不衛生な水を飲んで体調を崩し、命を落としてしまうことさえある。そうした犠牲者の大半は子供である。

このようなことは、私の暮らしている日本では考えられないし、想像もできない。私自身の置かれている生活環境が、いかに恵まれているものであるかを、この調べを通して、私は知った。

私は今まで、日常の暮らしの中で節水を心掛けていたが、このことでその思いが、より一層強くなった。

ただ、そんな私でも、水を大切な資源として意識しないで使っていると、つい、うっかりとしてしまうことがある。いつも続けて意識することは、決して容易なことではないが、一番大事なことだと私は思う。

また、私一人がいくら節水したとしても、その量はわずかなもので限界がある。そこで私は節水の輪を広げていくことが重要だと考え、早速、そのことを家族に話してみた。

母は、もともと私よりも節水上手で、話題は父の車の洗車になった。父は月に二回程、洗車をする。洗車の時は、まず、水を流しっ放しにして車に掛けながら洗う。

父が言うのには、この洗い方だと、車にのった砂埃が水に洗い流されて車の塗装表面をキズ付けないということだった。父が大切にしている車の洗車方法も理解できるが、この洗い方だと、相当量の水が砂埃を落とすために使われてしまう。

そこで私は、もっと良い方法はないものかと、視点を変えて家族でよく話し合ってみた。

その結果、車の附属品の毛バタキという鳥の羽根でできているモップを使い、まず砂埃をよく掃うことと、その後、お風呂の残り湯を使って洗車するという方法にたどり着いた。

この方法だと、洗車に使う水は、お風呂の水の再利用ということになる。土日に洗車することで私も水運びと洗車を手伝うことにした。今では、父も快く、この方法を実践してくれている。

このようなちょっとした工夫と意識で節水できる大切な水。日本のように水の利用環境が整った国では、水の大切さをあまり意識されることはない。しかし、私は、この日本の恵まれた水の利用環境に感謝するとともに、一人一人が水を大切に使うという意識を常に持たなければいけないと、強く感じた。

「背負い水」という心

東京都　渋谷区立松濤中学校
二年　小池由莉

私たち二年生は、校外学習で江戸の文化を発見することになり、予習として現代にも息づいている江戸を探してみることになりました。すると、江戸時代に江戸にだけ残っていた「背負い水」という言葉があることを知ったのです。この言葉は、東京生まれの東京育ちの人に受け継がれているということでした。熊本県の小さな島から東京に来た祖母に聞くと、やはりこの言葉を知りませんでしたが、「島では水を汲んで肩に担いで運んでいたし、もっと昔の頃は水を背負っていたから、きっと物を大切にするという意味だと思うよ。」と話してくれました。お米は八十八の手間がかかるのですから、一粒も残してはいけないと言われたことがあります。しかし、水はどこにでも、いつでもあるので、そんなに大切なものだとは感じませんでした。では、何故そのような言葉が残っていたのでしょうか。

江戸は元々小さな漁師の村で、浜辺が奥まで続いていたといいます。そこに江戸幕府ができ、庶民は浜辺に江戸城の濠を掘った土を埋め立てて、長屋を作って生活をしました。土の下は砂浜ですから井戸を掘っても海水だったので、江戸時代の前半は水売りが来て、かめ一杯で生活をしていたそうです。徳川家康は江戸の街づくりには何よりも水の確保に目を向け、努力と苦心によって玉川上水ができたのです。そして、百万都市江戸の人々の暮らしを支えていくのです。だから、水は大切なものだったのです。

祖母は、今でも米の研ぎ汁を取っておいて、汚れを落としたあと、最後は植木にあげながら話しかけています。私は小さなとき、それを不思議に思って見ていると、

「水をあげながら話しかけると、植木がよく育つんだよ。」

と教えてくれました。その研ぎ汁は、土に流れ、蒸発して空にのぼり、雨となり、再びこの東京に還ってきます。祖母が植木に話しかけたのは、水を使わせてもらった感謝と、また綺麗な水になって戻ってきて欲しいという気持ちからなのではないかと思うようになりました。

しかし、最近、背負い水という心は忘れられてしまっているようです。もし背負っている水が、その人の使う分の資源だと考えると、私たちは自分の分では足りず、他の生き物の背負い水まで使って、発展してきてしまった気がします。私の住まいの近くには、東京オリンピックで暗渠となった渋谷川があります。なんとそこは童謡の『春の小川』のモデルだったのです。今、やっと環境問題として取り上げられるようになり、川が戻るといいます。春の小川の記憶の蓋を取ることから始めようと、一歩動き出したのです。資源は自分たちが作ったものではなく、自然から貰ったものなのです。

東京は標高五〇メートルに大きな池が並び、湧き水の多くは崖から浸み出ています。礫層に地下水が流れているのです。多摩川の河原ではクジラの骨や貝の化石が見つかり、海の底だったことが分かります。次第に陸地となり、その上を多摩川が移動しながら流れて、小石を敷きつめました。さらに、火山灰などが堆積し、東京はその上に乗っているのです。雨水は礫層を通り気の遠くなるような長い年月をかけて東京湾の方向に流れています。その大切さに気付かず、ずっと捨てられていた東京駅の地下水は、六年前、立会川に運ぶことになり、半年でボラが押し寄せたのです。

そして今、その地下水を貴重な資源として考えるならば、もっと有効な利用法があるのかもしれません。東京を旅してきた地下水は海底からも湧き出し、様々な生き物を育んでいます。繰り返されてきた水の営みが、この東京を生み育て守ってきました。その存在に気付いた時、私たちの毎日は、もっと豊かなものになるでしょう。

古人（いにしえびと）に倣（なら）おう！

神奈川県　横浜市立港中学校
三年　石井綾乃

その朝、私は前夜からの熱と頭痛の為、遅くまで寝て居た。起きた時には、家族は皆出掛けた後だった。顔を洗おうと水道の蛇口をひねった。ブシュッ!!あれっ、水が出ない！しまった…、今朝方、今日は断水するから早く用を済ませておく様に…と言われたのに。

それから数時間、私の葛藤は続いた。先ず冷蔵庫を漁った。普段は何も気にならないのに、水が出ないと知った途端に喉がカラカラになった。お腹が空いても、何も食べる気になれない。口の中がまずくてうがいをしたいが、牛乳しかない。フラフラする体と空腹、渇きの中でイライラが絶頂に達した。何もする気になれず、呆然とする私の頭の中を色々な思いがよぎった。

先ず思ったのは、昨年の夏休みに平和学習で行った長崎の平和の泉。被爆し、脱水症状に陥った九歳の少女が、飲めば死ぬと分かっていながらも、渇きに耐えられず油の浮いた水溜まりの水を飲んでしまった。その悲話をもとに全国から集まった浄財で、今は平和の泉が作られている。その時の私はあまりにも可哀相で涙が止まらなかった。

そして次に思い出したのは、昨年我が家で行（おこな）った擬似避難所体験。ライフラインが使えず、水も食糧も、配給される分だけ。家族全員が一間にごろ寝して、実際に被災した時を想定した生活をしてみた。苦しかったが、今の恵まれた環境に感謝したり、大自然を含め、あらゆる「もの」に対する畏敬の念が生まれた。

あれから半年、私の中ではその頃の気持ちが早くも、薄れかけていた。それどころか、渇きに耐えかねた私は、体験後に購入した非常用の水にさえ手をかけた。封を切る時、

「三年間は持つぞ！」

と得意気に言っていた父の顔がよぎり、罪悪感が生じた。その大事な水を一口飲んだ。ぬるい！でも、喉にクーッとしみこんでいく。二口、三口…と飲むうちに最初の罪悪感はすっかり消えた。終いには（少しくらいはいいだろう）と、その高価な水で歯を磨き、顔を洗い、トイレの流水にも使っていた。そして母の書き置きをみつけた。

「やかんとペットボトルに水を汲んである。」

また罪悪感に苛まれた。頭で大切と思ってはいても、慣れというのは恐ろしいものだ。

日本は水に恵まれている。だから、私を含めた多くの日本人が有難みを忘れ、水資源の豊かさを過信している。でも、この日本でも確実に水が足りなくなっている所があることを忘れてはいけなかった。

小学生の頃、私は夏休みの自由研究で温泉について調べ、毎年家族と各地の温泉を巡った。ある温泉宿の宣伝文句には、とても感動した。

「地球が沸かしたお風呂です」

そうだ！宿が掘ったり引いたりしている温泉も、もともとは地球という大自然が作ってくれたもの。水や鉱物等の恵みがあって、そこに人の手が加わり、様々な条件が揃ってこそ、初めて我々が温泉を享受できる。その事に気付いた時、私は思わず足元に手を合わせ、地球の恵みに感謝した。しかし、商業目的で乱開発された温泉地で、今お湯が涸れてきている。人間の欲任せの行為に、地球も脱水症状を起こし始めたのだ。

古来の日本人は五感で水を感じていた。田畑に恵みをもたらす水、五穀豊穣を願って水を祭った。池泉回遊式庭園に巡らされた水は、折々の四季を愛でる人々に安らぎを与えた。お堀の水は、戦の時に敵から城郭を守る、守りの水になった。

私達は水について一つ一つ考えていかなくてはならない時に来ている。節水、再利用、道志水源ボランティア…先ずは身近に出来ることから始めよう。古人の智慧や心に倣いながら。

都会と地方の水の格差

富山県　高岡市立高陵中学校
二年　藤　島　早　紀

ここ何年かでコンビニなどで見かけるミネラルウォーターの種類や量が大幅に増えている。また、テレビなどでは浄水機の宣伝もある。いわば、今、日本は水ブームなのであろうか。

私は疑問に思う。なぜ、日本人は市販の水に頼らなくてはいけないのか。また、日本は他の国と比べ、水道普及率が約九六パーセントと高いのに、なぜ外国から水を輸入しているのか。

日本では二十年前と比べ、ミネラルウォーターの消費量が二倍以上になっている。また、製造業者の戦いもあり、国内では五〇〇種類もの水が販売されている。はたして、それはよいといえるのか。

世界では、支援団体の援助などもあり、全体の約五九パーセントの家庭や地域に水道が普及している。しかし、水道があるからといって、安全であるという意味ではない。浄水が不完全であったり、清潔さに欠ける水を流している地域では、コレラや赤痢、チフスが広がったり、下痢による脱水症状になる人がいることが現状だ。しかし、日本は徳川家康が城造りや町造りと共に水道の開設に着手したのをきっかけに古くから水の文化が進められてきた。また、日本は多くの山に恵まれ、森林や雪どけ水も豊富だ。それなのに、なぜ水を買わなくてはいけないのか。

その一つに私は「水の格差」があるからだと思う。ミネラルウォーターを利用する人は、主に都会の人である。その反対に地方で利用する人は少ない。そのかわり、地方では、水道の水を飲用している所が多い。これは、人口の違いだけではないと思う。私は、雪どけ水など水が豊富な富山県に住んでいる。そのせいか、ミネラルウォーターを買ったことはあまりない。しかし、近くには水の名所がたくさんあるため、よく祖父母と水をくみに行く。都会では、そういった光景をあまりみたことがない。これは、地形や風土だけの問題ではないと思う。さっき、「水の格差」といったが、これには二つの意味がある。

一つめは、水の技術の普及による格差、そして二つめは、水に対する「愛水心」の格差である。私の住む富山県は、後者のほうが多いと思う。富山県では水の美味しさを知っているからこそ、家庭も企業でさえも水を汚さない。そのため水に対する思いがうまれ、きれいな水が受け継がれている。前者はどうだろうか。後者とは逆に水への思いが受け継がれていないから技術が発達したのではないか。

私は、どちらの文化も大切なことだと思う。だが、水も豊富で、古くから水の文化が栄え、安全な水に恵まれているのにもかかわらず水に対する思いがうすれていると思う。最近、「もったいない」という言葉をよく耳にするが、日本人として地元の水を愛せないことがもったいないと思う。水を愛することで、さらに技術とおいしさの他に「美しさ」の文化も発達すると思う。また、地元の川や海がきれいになるだけで水に対する思いと自信がつき、水を輸入する立場から水を輸出できる立場に変わると思う。いずれにも、自分の近くの水を大切に思うことが大切だと思う。

先代からうけついだ水の文化を私たちがどう発達させられるか、それは、近場にある自然の水を知り、一人一人が愛することだと思う。そして、二つの水の格差がなくなったとき、三つの文化が融合してお互いを引き立たせられると思う。

「水の格差」、それは人類の中ではあまり知られていない格差であるが、自然というものの中では最も重要な地方と都会の格差なのではないか。

地球温暖化と水の関係

富山県　高岡市立高陵中学校
一年　林　　なな子

「水の出しすぎは、だめやよー。」
と母の声。学校から帰ってきて手洗いをしている時、我が家で毎日見られる光景です。
「もう中学生やから、いちいち言わんでも分かってるわ。うるさいなー。」
どうして母はいつも同じことを言うのでしょう。水が大切なことなど、私は十分承知しているつもりです。夏の体育の時間が終わって飲む水は最高においしいものです。まさに「命の水」だと感じる瞬間でもあります。もし水がなければ、干物のようにカラカラにひからびてしまうに違いありません。六年生の時に理科の授業で、人間の体の約七割は水分でできていると習ったのもちゃんと覚えています。だから、汗となって出ていった水分は補給しないと、私たち人間は生きていけません。水は私たち人間にとって必要不可欠なものだと十分理解しているのですが、どうして水を大切に使わなければならないのでしょう。蛇口をひねれば、水はいくらでも出てくるのに…、と疑問をもち、考えてみることにしました。
以前テレビで、オーストラリアのある農村地帯のことを報道した番組を見ました。長い間雨が降らず、作物を作ることも、その土地で人々が生活することもできなくなったという内容のものでした。貯水池には水がなくなり、草も生えなくなるほど地面がひび割れている状況から、本当に長い間雨が降っていないのだということが分かりました。そこに生息するカンガルーやコアラなどの動物たちにも被害が及んでいました。また、その土地をまだ離れていない人たちは、十分な水が得られないので、たまに降る雨水をためて無駄のないように生活することを強いられていました。
私と年が同じくらいの女の子が、
「私たちがシャワーを浴びることができる時間は二分だけなの。それ以上使うと、生活するのに、とても厳しいの。」
と言っていました。それで私はシャワーを浴びるのに、一体どれくらい時間がかかっているか計ってみました。結果、顔、体、髪、すべて洗い終わるまで約四分間もかかっていました。それに、私の家では、毎日、浴槽にお湯をはっています。その女の子の家庭の何倍の水を使っているのか考えただけでも恐ろしい気がしてきました。
それにしても、どうして今まで普通に雨が降っていた場所に降らなくなってしまったのでしょうか。それは、地球温暖化が原因で、異常気象が起こっているからだそうです。温暖化は私たち人間が引き起こしたもので、それは人間を苦しめる結果となっているのです。日本も、オーストラリアの農村と同じようにならないとは限りません。他の国だけの問題だと思って、知らん顔をしていてはいけないと思います。
水を大切にするということでは、私の家では、風呂の残り湯を洗濯に使用しています。また、顔を洗う時は、水を流しっぱなしにするのではなく、洗面器に必要な水だけをためて洗顔しています。その他にも私たちにできることがあれば、進んで取り組んでいこうと思っています。
また、温暖化を食い止めるためには、その原因を少しずつでも減らしていかなければならないと思います。クーラーで冷やしすぎないとか、食べ残しをしないとか、必要以上に作らないとか、とにかく無駄だというものをなくせばいいのではないでしょうか。私も、新しい筆箱を欲しがったりとか、まだ使えるのに新しいものを買ったりするのを、ひかえたいと思います。
命の源となる水を確保するために、私たちに何ができるのかを、一人一人が真剣に考えなければいけない時がきているのではないかと思います。

命の水

石川県　北陸学院中学校
三年　東田陽子

水って、きれいなんだな。

宇宙から撮影した地球の写真を見た時のことだ。様々な形の大陸や島にも興味を覚えたけれど、その周りの青い海に私の心は強くひきつけられた。

水って、本当にきれいだ、と。

安心して、毎日水道の水を飲める。これは衛生的にきれいな水ということ。

そして、橋の上から眺める川や、海水浴に行く海は、澄んでいて視覚的にきれいな水である。

しかし、人間の発展に伴って水はどんどん汚されていっている。

水俣病・イタイイタイ病について知った時、私は、水道の水を飲むのが少し怖くなってしまった。だけど、今はそんなことはないだろうと思っていた。工場排水によって水質汚染が引き起こされてしまったのは、当時の日本に環境問題についての知識がなかったからで、今はきちんと対策が取られているはずだ、と。

だが、水質汚染という言葉は、今も主流だ。

現在、水質汚染の原因は何なのか。調べてみると、生活排水だった。工場排水に関しては、公害問題以降は規制が行われているが、一つ一つの家庭に対して制限はない。洗剤・石けん・油・牛乳…。これらの物質が、環境の調和をくずし、川や海の汚れの原因となっている。

と知った時、私は驚いた。要するにきれいな水をだめにしていたのは、自分達だったわけだ。自分の家が流したものなんて、ほんの少しだけど、そのほんの少しが、大きな大きな水質汚染のもとなのだ。

それなら、逆のこともありえるはずだ。ほんの少し汚さないようにすれば、大きな浄化につながる。そう信じて頑張ろう、と決めた。

我が家では、油を流さないようになった。何かに染みこませて、燃えるゴミに捨てる。あれをそのまま流した場合、流れこんだ川に魚は住めなくなる。その状態の水を自然に戻すには、ふろおけ三三〇杯分の水が必要だというデータもある。学校で食器を洗う時に、洗剤を使わないようにもなった。友達にも呼びかける。

そんな時に、私の頭に浮かんでいるのは、宇宙に浮かぶ地球の姿、美しい海や川の光景だ。きれいな水が、未来も失われないでほしいと思う。安心して飲める水も、心をいやしてくれる海も、ずっと存在していてほしい。

そういえば、人間の体の七〇パーセントは水分で構成されているという。つまり、地球上の水をどんどん汚くしていけば、私達の体の七〇パーセントも汚れてしまうのだ。

とにかく、私達には水がなくてはならない。きれいな水を守ることは、人間にとって必要な行為なのだ。

支え支えられ、守り守られて、生きていきたい。命の水と。

仮想水とトマトと紙と私

静岡県　興誠中学校
三年　小林太士

「ぴしゃんと　みずが　ひとしずく　とびだして　ながい　たびに　でた」
「ふっつと　トマト果汁が　一滴　飛び出して　私の手の甲に　かかった」

前者は、小学校の頃読んだ「しずくのぼうけん」の一節だ。バケツから飛び出したしずくは、クリーニング店での水、病院での検査用の水、雨水、水、蛇口の水と姿形を変え、再びしずくへと戻るのである。後者は、母が作っていたミートソースの鍋を覗き込んだ時の一場面だ。しずくのぼうけんにもあるように、水は循環する。今まさに使い終わった水は、再び私達の元へ綺麗な水となって戻ってくることは誰もが知っている。しかし、ミートソースで使ったトマトはどうだろうか。

先日、興味深い資料を見出した。世界の水の使用量の内訳は、工業に二割、生活に一割、残り七割は農業であり、農産物を生産するのに必要な水が多い。例えば、一キログラムの小麦を作るには一トンの水資源が必要だというのだ。だから、畜産物は穀物を飼料として用いるため水の使用量が非常に多い。このように農産物の生産に要した水のことを「仮想水」と呼ぶ。今日まで私達は、飲み水、洗濯用の水、プールの水、海や川の水といった目に見える水を大切にし、節水に積極的に取り組む事で水の大切さを強く認識してきた。

しかし、仮想水はどうだろうか。母が作っているミートソースの中身の一つであるトマトの裏側、つまり目に見えない仮想水を誰が思い浮かべるだろうか。私の手の甲にのったトマト果汁に対し、私はただただ熱いと感じただけである。トマトを育てるには、一体どれくらいの水が使われるのだろうか。夏になると、裏庭の畑で祖父がトマトやキュウリを栽培する。毎朝、ホースで畑一面水を撒く。これを、二ヵ月程繰り返し、祖父が丹精を込めて作ったトマトの幹には、陽の光を浴びて真っ赤に色付き、たわわに実ったトマトが弾けんばかりに、収穫を今か今かと待っている。これを想像しただけでも、どれだけ多くの仮想水が使われているのかが分かる。

「先生の机の置いてある不要になった紙の山」この紙の行く末はどうだろうか。私ならば、裏紙に計算式を解き数学の勉強に役立てる。思い返せば、生徒会の先生から貰うメモは、いつも必要事項が裏紙に書いてあった。ある日、生徒総会の冊子を印刷していた先生は「エコアクションだ」と呟いた。昨年まで片面印刷で専門委員の計画資料を刷っていたが、今年度は両面印刷に変えた。その結果、例年千枚以上使っていた紙を、その半分に抑えることが出来た。先生の言葉から、紙の節約や環境保全に配慮していた事が伺われる。しかし、後でよく考えてみると先生の行為は、仮想水の節約にも繋がっていた。仮想水は基本的に農産物を生産するための水を示すが、紙の場合も当てはまるのだ。一枚の紙を生産するには大量の水が必要だ。その証拠に、静岡県の富士市には製紙工場が多い。なぜならば、富士山の雪解け水が大量の地下水となって湧出するからだ。その水を利用して、紙の原料であるチップと水を攪拌し、紙漉きをするのである。紙一つをとっても分かるように、工業製品にも仮想水は適合する。

「しずくのぼうけん」から小学校の頃、目に見える水の大切さを学んだ。だから、私は今まで循環する水、つまり目に見える水を大切に節約しようと心掛けてきた。恐らく、大勢の人も同様であろう。さらにその水だけでなく、世の中には仮想水のように目に見えない水が存在する。私が小学校から愛用している筆入れや鞄もその一つだ。ただ「ものを大切にしよう」「環境に配慮しよう」との観点からだったが、結果的には仮想水を節約していたのだ。環境問題が叫ばれる今、環境保全を促す行いが、強いては仮想水を節水し、水を大切にすることに直結していたのだ。

水に囲まれて暮らす人間

滋賀県　守山市立守山中学校
三年　鈴　江　隆　志

水は環のようにつながっています。人が水を使うということも、水の循環というしくみの中で行われることにすぎないのです。

水の循環のスタートを仮に海とします。まず海の水が蒸発し、雲となります。次にその雲が冷やされて、地表に雨が降ります。その雨がやがて川の流れとなり、海に注ぎ込まれることで水の循環という環ができるのです。その中において、人は循環の一部である川の流れを引き込んで使っているだけというものでしかありません。もちろん、人間に使われた水も川から海へと帰っていきます。人間が水を使って暮らしていけるのは、水の循環という大きな環に少しだけくい込んでいるかであってもし水の循環が止まったり、なくなったりしたとすれば、人間の水を大量に使う生活はおろか、生きていくこともできなくなります。それも人間に限らず、植物や他の動物も全てこの水の循環という地球に海ができて以来ずっとまわり続けている環に生かされ、命を継いできたのです。雨が降り、川に水が流れ続けていることは、水を必要とする生き物にとって生命の保障を得ているといってもよいのです。さらにこの水の循環の偉大なところは、海ができて以来一滴たりとも地球の水分の量は変わっていないところにあります。水は宇宙から付け足して降ってはきません。水の循環によって姿を変え、形を変えることでまた同じ姿に戻ります。海ができた数十億年前の地球の水分と、現在の地球の水分の量をしぼって比べたとしても、その量が違うことはありません。

水の循環というのは地球に海がある限り未来永劫続きますが、近年水自体が汚染されています。原因はもちろん人間です。車、工場、家などから水を汚染する排ガス、洗剤等が水にとけ込んでいます。そのため、雨が酸性を帯び、植物をとかし、人間の建築物をも溶かすようになってきています。また、飲み水も心配です。都会の飲み水などは、水を消毒するという名目で塩素が多量に含まれており、塩素を体内に取り込むことで障害を起こしたり、塩素と汚染物質が混ざりあってさらに有毒な物質をつくってしまうからです。この水は東京や大阪などの大都市に多く流れているのですが、徐々に広がっていくかもしれません。さらに地下水も心配になってきます。今、私達が使い、時には飲んでいる地下水は水の浸透の時差により、江戸時代のものだそうです。江戸時代ならまだしも、明治維新や太平洋戦争を経て、高度経済成長や今の平成の年代に入ってくると、地下水にまで塩素を入れなければ飲めなくなってくるでしょう。飲み水の含む汚染物質や塩素によって中毒など起こされてはたまりません。水の質は数百年前の人々の行いによって変化するのです。ここ数十年水を汚してきた私達への見返りは、私達だけでなく私達の子孫にも降りかかってくるのです。

水は蛇口をひねればすぐにでてきます。しかし、そこに水があるためには大変な過程を経ていることを多くの人は知りません。また水が私達の生活にかけがえのないものであると知りつつも水を汚し続けています。私達人間が汚した水というものは本当の意味できれいなものにするのは難しく、かつ何百年という長い年月をかけていかなければならないものです。私達にできることは少ないのですが、洗剤を節約したり、水をあまり使わないようにしたり、酸性雨で減っている木を植え直すことぐらいはできます。今からもう一度安全できれいな水を取り戻すため、私達一人ひとりが生活の中に工夫をこらし、それを続けていくことが何よりも大切なことです。

「水道水を一日制限する私のミッション」

京都府　立命館宇治中学校
二年　三田優奈

川や海の汚れで問題なのは、家庭から出る汚れた水である、と本で読んだので水道の水を一日制限してみて不便さを味わおう！ミッションを自分に与えたらどんな感じかやってみた。

五月三日、快晴。水を飲まないと生きていけないので、五〇〇ミリリットルのペットボトルの水は使用する事にした。

まず、朝起きて乾いたままの歯ブラシを口に入れるとぱさぱさで全然みがけなかった。仕方なくて貴重な水一杯を使う。使った後、歯ブラシを洗う水ももったいなくて洗う気にならない。顔は風呂の残り湯で濡れタオルをつくって拭いたけどへんな感じ。寝癖もそのタオルを使って直す。私はバトン部に入っているので、大会に向けて朝、自宅前で練習をした。家に帰って水道で手が洗えず、ベトベト。お風呂の残り湯を洗面器にすくって洗うと、流水じゃないので、洗面器の水は当然石けんでにごった。しかも、昨日入った後のお風呂の残りの貯めておいたお湯だから、さらのお湯とは違って菌もいるだろうし。「え～っ。いくらきれいにしてるとは聞いても、こんなににごった水を、滋賀の人や京都の人が使ってから浄水して、うちら大阪の人が使ってんのー。一番先に使える滋賀県の人になりたーい。」

その後、京都の東大谷にお墓参りに行ったので、龍の口から出ているお清めの湧き水で手を洗うと、冷たくて、気持ちよくって、最高ー。水にホッとし、リラックスさせてもらえてるんだと思った。

その日はおばあちゃんの家にいることが多くて、外食が多かったので、家で水道を使うことがあまりなかった。それでも、トイレを使った後トイレの水を流さないでいると、入った時にモクモクっと、なんか臭くいやな感じがした。そのうちに、タンクにお風呂の残り湯を入れて流そうと思っていたが、ついつい、癖で思わずトイレを使った後、レバーをまわしていて、流してしまっていた。

お風呂も入らないでいることにすると、連休の数学の課題問題の勉強をしていても、今日一日よく歩いたので体がべたべたして気持ち悪くて集中できなかった。

ペットボトルの飲み水は、ほとんど飲んでいて、後ほんの少し残る程度だった。この水が命の水だったんだ。

ミッションに付き合ってくれた母は、化粧した後の手洗いからはじまり、お天気が良いのに洗濯が出来ないのがはがゆいらしく、朝、ゆで卵ひとつゆでられず、ピラフを作ったらフライパンにこびり付いたご飯粒はきになるし、漬物を置いたまな板も洗えないから、ストレスになる。と言っていた。

人間は一日に体に入れる水と出す水がトントンでバランスがとれているようだ。世界には、安全な水を飲めない人が沢山いるらしい。水は川の微生物が汚れを分解してくれる循環のしくみがあって保たれている、限りのある水。私達が食べている、野菜や家畜も生産するのに沢山の水を使っているらしい。普段、何気なく使っている水のありがたさが少しわかった。

私の通っている学校の清新の授業では、自分ってだめだ、とあきらめの自制パラダイムを自分で作ってしまわないように！と教えてもらった。「私一人がしたって意味がない。ヤンペ」と思わないようにしよう。日本の公共の建物では、雨水をためて水洗トイレの水に利用されている所もあるようだ。私も水洗トイレの大小のコックを切り替えたり、シャンプーを使い過ぎたりしないようにして、出来るだけ大切に水を使って環境にやさしく出来ればいいなーと思った。

雨水の再利用について

京都府　立命館宇治中学校
二年　西村祐香

地球温暖化の問題が新聞やテレビで報道されだして随分たちます。私自身も学校や家で、地球環境保護について考える時間を持つようになりました。しかし、環境破壊の問題は深刻化するばかりで一向に問題解決が進んでいるというニュースを聞きません。私は今回、人間にとって貴重な資源である「水」、特に比較的身近な存在である「雨水」の再利用について考えてみようと思いました。

少し前までの日本では「空気と水と安全はタダである。」と言われていました。私の住んでいる大阪ではほとんどの水源を琵琶湖、淀川に頼っています。しかし最近は気候変動もあり、カラ梅雨となれば、市役所からの節水のお願いが、更には断水まで起こり窮屈な思いをしなければなりません。考えてみれば、水不足の時にも水は普段どおり必要なのです。だから常に今ある水道水を大切に使うか、新たな水源を考えるしかないかと思います。

少しインターネットなどで調べてみましたが、地球には三億七〇〇〇万立方キロメートルの水があり、その内の九七・二パーセントが海水、二・二パーセントが氷河や万年雪、そして、残りのわずか〇・六パーセントが地下水で、川や湖などの表流水は〇・〇二パーセントです。生活の必需品である淡水はほんのわずかなのです。そして、この淡水の元は雨水なのです。

ここで注目したいのが日本の雨量です。日本では世界の年間平均降水量の二倍近い雨が降るそうです。日本は世界の中でとても雨に恵まれたありがたい地域と言えます。

一方、シンガポールでは国内だけでは水が足りないため、不足分を隣国のマレーシアから買っているそうです。シンガポールとジョホール州を結ぶ海峡には送水管があり、シンガポールに向けて送水されています。日本は自然資源は乏しい国ですが、水源はシンガポールのように外国に頼る必要はありません。また雨は、山村にも都市にも降ってきます。遠く離れた山奥のダムを水源にしなくても、水の需要の多い都市部に降る雨を有効的に利用すればよいのではないかと思います。

現在日本では、もったいないことに、多くの時間とお金をかけて飲み水にした貴重な上水を、飲用以外に、トイレの流し水や庭の植木への散水、洗車などにも同時に使っているのが実態です。なので、今の生活を見直し、地球上のたった一%の淡水を有効利用する為にも、雨水を生活雑用水に活用すればいいのではないかと思います。例えば日本の建築物の多くには樋が備え付けられていて、貯水用のタンクを新設すれば集水は比較的簡単なようです。

ただ、実行するためには問題も多いと思います。各家庭に貯水用タンクを配ったとしても、便利な水道があれば、ついそちらを使う人もいると思います。またタンクに虫がわくので不衛生だと嫌がる人もいるでしょう。何か良い方法で使い勝手のいい設計を建築家の方々に考えてもらったり、国や府、市町村をあげて、街全体として取り組んでいかなければならないのかも知れません。

シンガポールでは、市街地に降る雨も貴重であると考え、環境省や住宅開発局が協力し、集排水設備の整備を進めているそうです。日本ではまだまだ一般的ではありませんが、それでも一部の市民団体や自治体では各家庭で雨水の貯水や再利用をしているところもあると聞きます。

地球上で極めて希少な淡水の利用方法を考えることはとても大切です。日本は雨量が豊富で、その上技術に優れた国です。ぜひリーダーシップをとって研究し、諸外国に紹介していくべきだと思います。こうしたことは地球環境保護の視点からも世界中の人々に喜ばれる価値ある行動だと思います。

青い地球と未来を見つめて

奈良県　山添村立山添中学校
二年　山　本　み　か

川の水の上にぷかぷか浮いているゴミ、今までの私は、「しょうがない、私が捨てたわけじゃない。」と通り過ぎてきました。しかし、水の大切さを知った今水に対しての考えが変わってきました。

私の卒業した小学校では、小学校一年生から六年生まで、みんなはだしになって田植えをしてきました。毎年のようにしてきたお米作りだったのですが、私が六年生の時に、モザンビークという国へ、お米を送ることになりました。

それまで、田んぼの中のにゅるっとした感触が嫌いで、なかなか楽しい田植えの思い出がなかったのですが、私たちの作ったお米が日本を飛び出してモザンビークの人たちに食べてもらう、それを聞いた私は、とてもウキウキした気持ちで、一本一本「大きくなれ。」という思いで田植えをした思いが残っています。

しかしその年は、毎年に比べ雨が降らず、お米がなかなか育ちませんでした。そこで私たちは、近くの小川の水を引いて、田んぼの近くにドラム缶を置き、そこから田んぼの水を確保しようと計画を立て、実行しました。その時思ったこと、それは、水は私たちの手で動かせ、そうすることによって、水を田んぼに育つ稲の役に立てるんだということです。そしてしばらくして、田んぼに十分な水を確保できました。すると、田んぼの稲がみるみる育って行ったのです。枯れかけていた稲は水の存在によって立派なお米になれたのです。

この時、水は命の源だなと感じました。またこのことから、水を必要としているのは私たち人間だけではないのだということを私自身が実感できました。

私はそう思い始めた日から、水の無駄使いに目を向けていきました。今までの私の無駄使いしてきた水の量は、バケツ一杯分どころではない、そう思った私は、これからの生活の中で、どうしたら水を有効に使えるのかと考えた時、あまりにも多くの水の無駄使いをしてきたんだということに気付かされた私は、その日からすぐ、水を有効に使うよう実践してきました。

まずは、歯みがき、花の水やり、そういった間のちょっとした水の出しっぱなしをなくすことです。ちょっとした、の気持ちが積もっていき、その無駄な水の使い方が大きな物になっていっていたのです。私のちょっとくらい大丈夫という水への考え方はまちがっていました。

次に水をきれいに使うことです。これも水を有効に使う方法の一つだと思います。そして私の考えを家族に伝え、それからは、フライパンなどについた油は、新聞紙などでふき取ってから洗うようになりました。

こういった小さなことかもしれないことから始めた今では、家族全員で水の無駄使いに気を付けるようになってきました。

蛇口をひねれば水が出てくる、しかしこのことを普通、当たり前と勘違いしてはならないのです。私たちが蛇口から水を得るまでには、多くの人の手と、何より、この水や川といった大きな自然が水を支え、作り出しているということを忘れてはなりません。

私たち人間は、水無しでは生きて行けません。またこの地球に育つ動物、植物も同じです。水を使う権利は皆平等なのです。しかし私たちはそのことを忘れ、水を大切に使えていません。私たちの生活で水はかかせない物です。またその水を生き物たちと分け合って共存していくことが必要です。私たちがそのことに気付き、皆が実行したらコップ一杯の水の無駄使いもなくなるでしょう。そうなればきっと未来は明るいでしょう。あなたもその一歩踏み出しませんか。

めぐる水の中で

島根県　大田市立第一中学校
三年　山田彩花

私の側にはいつも優しい水があります。優しい水というのは、私たちの手元に届けられるまで、川や森林といった自然の中で浄化された水のことです。自然の中をめぐっていく過程で水は、養分やたくさんの命とふれて優しくなっていくのです。そして、海まで行った水はまた雨になり、何度も何度も私たちのまわりをめぐっています。

そんな循環の中で水が人の手にふれる場面が二度あります。

一度目は、浄水場で飲み水がつくられるときです。私の父も私が四歳のときから七年間、浄水場に勤めていました。父はたった五人の職員とともに二十四時間体制でダムの貯水量や水質を看視して、安全な飲み水をつくってくれていました。

私はそんな父がしていた仕事と父に対して誇らしさを感じています。

父は休みの日にさえも水の事を考え、水道水から少し塩素のにおいがしたり、大雨が降ったりすればすぐに当直の人に連絡をし、注意を促していました。初夏には洪水による水質の悪化に、真夏には渇水に、冬には水道管の破裂に注意をはらっていました。不規則な生活のせいで髪が白くなってしまった父。果たしてその苦労は市民のためだけに重ねられたものだったのでしょうか。

私はそうではないと思います。確かに私も昔は「父は市民のために頑張ってくれているのだ。」という事しか感じていませんでした。しかし、今では「人のためだけでなく、環境のためにも父は働いていたのだ。」という思いを強くしています。

そう思ったのは父との会話がきっかけです。父は日ごろから、水について色々なことを教えてくれます。その中でも一番心に残っているのは、生活排水についての話です。合成洗剤や油などで汚れてしまった水は自然の力ではきれいに出来ないことを父は熱く語ってくれました。そのような水は浄水場できれいにするしかない、だから私は父たちが環境のためにも働いていたと思ったのです。もしも、浄水場で水がきれいにしきれなくなってしまえばどうなるのでしょうか。きっと汚れが水の美しい流れの中にまぎれ込み、すぐに安全な水は失われてしまうことになるでしょうか。私たち人間のせいで。

二度目に水がふれる手は、私たち自身の手です。私は確信しました。自然が生み出してくれた水を私たちは借りているのだと。そしてそれと同時に、たくさんの優しさがあふれているこの水を私たちはただ汚し、垂れ流しているだけでは絶対にいけないのだと。

一度目にふれた父たちはたった六人で必死に水をきれいにしていました。それは借りる側の者としての責任なのです。もちろんその責任は私たちにもあります。私たちはそれを果たせているのでしょうか。

私の家ではみんなで食事のときにドレッシングやスープまで残さず食べ切るようにすること、お風呂ではシャワーを使わず、バスタブの中の水を使うようにすることという二つの約束を取り決めて、守るよういつも心がけています。一度に何もかもしようとしなくて良いと思います。我が家でやっているのも小さなことだけれど、そのように約束をつくる家が少しでも増えてほしいと心から願います。

守ることが出来そうな目標を決めて、それが出来れば次のものというふうに徐々に、しかし確実に、家庭から水を大切にしていくことが重要だと思います。それが私たちの責任を果たすということなのです。小さなことでもみんなでやればきっと大きな力が生まれると私は信じます。たった数人の浄水場の職員に任せるのではなく、私たちの手でこの優しい水を守っていきましょう。

水はこれからもめぐっていくものだから。

水不足の経験を通して

愛媛県　伊予市立下灘中学校
二年　宇津博美

「オギャー」
私は産まれた瞬間から、大変な「水不足」を経験しました。でも記憶にはありません。
　私が産まれたのは平成六年で、丁度愛媛県が大渇水の年でした。八月一日から七日までの一週間は、「水の週間」ですが、私の誕生日は八月二日で、まさに大渇水の中でも水の週間内に産まれました。何か特別な因縁を感じます。流産続きで初めての子供、帝王切開そのうえ水不足ということで、母はとても心配したそうです。本来ならば当日入院でいいものも、時間断水が行われていたために、前日入院をしたそうです。又、手術も水が出る時間帯に合わせて行い、お見舞い客も断るほどでした。手洗いやトイレの水でさえ、もったいないと思われていたからです。無事産まれたのちも、水不足は続き、困ることはたくさんあったそうです。おふろ、食事、ミルク、布オムツの洗たく等々です。特に夏なので、汗をよくかき、毎日シャワーをしたくても、できませんでした。又、水道水は水圧が下がったため、汚れが混じり、飲み水にはふさわしくありませんでした。そのため、初めてペットボトルの水を買って、飲んだという経験をしたそうです。手軽で便利で、「とてもありがたい」と感動したそうです。
　母は毎日テレビのニュースで、ダムの貯水率と降水確率をかかさず確認していたそうです。四国最大の早明浦ダムは、特に気にしていたそうです。このダムは、高知県にありながら徳島県と香川県の飲料水として利用されています。
　私が産まれた当時は、まだアパートでの仮住まいで、水が出る時間帯に一斉に使用するため、少ししか出ないことや、家の中はくみ置きのバケツだらけになるなど、今思い出しても大変なことばかりだったそうです。
　そんな中、無事産まれた私は、祖父の一文字をもらって、命名され、大きな病気もすることなく、小学校から今まで皆勤賞で頑張れています。
　世界では水不足のために、私よりずっと幼い子供達が天秤棒を使って、水を運んでいる様子を目にすることがあります。私達は朝シャンをしたり、水を出しっぱなしにして歯みがきをするなど、いとも簡単に蛇口から出てくる水を、無駄使いしています。発展途上国の人に申し訳なく思い、心が痛みます。その対策として、日本からは多くの人達がボランティアで井戸掘りに行っているという話を、見たり聞いたりもします。祖父の家には、昔ながらの井戸があります。夏は冷たく、冬は温かいすばらしい水です。今でもスイカを冷やしたり、そうめん流しをしたりします。水道があるにもかかわらず、冬は顔を洗ったり、歯を磨いたりもします。
　また反対に私達が住んでいる四国では、豊富な水資源を利用した、観光スポットがたくさんあります。愛媛県では、淡水魚のおさかな館という水族館や、肱川の鵜かいがあります。高知県では、最後の清流といわれる四万十川の川下り、トンボ王国などがあります。香川県では、農業用水不足解消のために、たくさんのため池が造られています。その一つに満濃公園という広大なため池公園があります。
　地球上の人々が安心し、安全に生活できるように、貴重な水を大事に使うことが大切だと思います。ちりも積もれば山となるという言葉があるように、一滴の水も大河につながります。毎日毎日の小さな努力が、今問題になっている、地球温暖化からくる砂漠化防止につながるのではないかと思います。
　産まれた瞬間から、水に縁があった私。そんな私だからこそ、水を大切にしなければいけない。今回、その思いをいっそう強くしました。水とは生命の源、私達にとってかけがえのないものなのですから……。

つながり

愛媛県　松山市立日浦中学校
三年　北野智愛

人類はかつて、川のそばに文明を開き、栄えてきた。そして今、私たちは水と共に生きている。

私の通う日浦中学校のある河中地区は、石手川の上流に位置する。周辺には美しい棚田が広がり、緑と清流の豊かな自然に囲まれている。日浦中学校では、学校田を利用して毎年、お米と餅米を作っている。

私は、日浦のお米が大好きだ。炊きたてのご飯は、粒の一つ一つがつやつやと輝いていて、ふっくらしている。あまりにおいしそうで、おむすびにするのさえもったいなく感じるほどだ。お餅にしても、甘い。できたてのお餅を食べている友達は、笑顔で幸せに満ちあふれている。見ているだけで幸せな気分になれる。そのおいしさの原点は、水にある。

川の水でホウレンソウを作っている農家の方にインタビューをしたとき、「おいしい野菜を作るには、きれいな水が重要だ。」というお話を聞いた。

食することの喜びや楽しみは、水との深いかかわりがあるのだ。

日浦の川は、川底が見えるほど透き通っている。もちろん、魚が泳いでいる姿も見える。暑い日には、飛び込みたくなる。私の大好きな場所だ。そんなきれいな水が育まれるのも、雨水を浄化してから、川に流してくれる周りの山々からの恩恵である。

初夏には、この清流に、黄緑色の光を優しく放つホタルが飛び始める。日浦中学校では、このホタルの保護活動にも力を入れている。

ホタルが飛び交う景色は、たとえようもないほど美しい。思わず「うぁー」という声をあげてしまう。笑顔になれる。

そんなホタルも、水がなければ生きてはいけない。というのも、ホタルの幼虫は、カワニナを食べ成長し、成虫になると、水しか飲まない。ホタルにとっても水は、生きていくための大切な「命の水」である。

私は、このようにきれいな水に恵まれて生活している。とても幸せなことだ。水は人の心を満たしてくれる。

私は、石手川の清掃活動に幼稚園のころから参加していた。「白鷺の住める町づくり」をテーマに始まったこの活動。川の中や周辺のゴミを拾った。空き缶やお弁当の空箱だけでなく、タイヤや自転車なども捨ててあった。清掃をしても一年経つと、またゴミ箱のような状態に戻っている。とても悲しいことだ。ゴミを捨てて川を汚すのは簡単なことかもしれないが、汚れた川をきれいにすることは、大変なことなのだ。

また、学校でも、大切な水資源を守るため「ごみゼロ運動」に取り組んだり、先生方が学校のホームページに「日浦百景」を紹介したりするなど、日浦の美しい自然や水を守る啓発活動を推進している。一人より、みんなの力で、人やホタル、動物たちが元気で楽しく暮らせる水のきれいな日浦地区を守っていきたい。

人の命をつなぎ、人と他の生き物をつなぎ、そして自分たちの暮らしと他の人たちとの暮らしをつないでいる命の源、水。日浦の下流にある地域も、きれいな水でみんながつながっていられるようになってほしい。そうすれば、喜びや感動をみんなで共有することができるだろう。

そのためには、一人一人が水の恵みを実感し、水をきれいに保とうとする意識をもつことが必要だ。まずは、自分から。

共生の時代といわれる今、水との共生も必要不可欠だ。きれいな水は、おいしいものを食したり、ホタルが飛び交う感動を与えたり、動物たちが快適に暮らしたりするために、いつまでも大切に守り、未来へ残していかなければならない、限りある共有財産である。

森からの贈り物

愛媛県　上島町立岩城中学校
三年　山　本　悠　理

「アクアの森へ行ってみよう。」
やけに乗り気な父さんの言葉にのせられて朝早くから出かけた。「アクアの森？」小学三年生のぼくにはよくわからず、森に木を植えるんだという父の言葉に、もう春だというのに、寒くない格好をさせられ、長ぐつも用意して向かった。
　山へ着くと、農林大臣だという人、環境大臣だという人、おまけに総理大臣までいて、ニコニコしながら話をしてくれた。あいさつのあと作業が始まった。クヌギの苗木とスコップ、ささえる木、ひもをもらって山の斜面に植林をしていった。山肌は硬く、スコップもなかなかささらない。父さんに代わって穴をほってもらい、苗木を植える担当になった。地面がかわかないように、木の周りにかれ葉をしいた。山の中での作業は意外と寒く、粉雪も降ってきた。五本、十本と植えていくうちに体も慣れてきた。すると父さんが
「この森からおいしい水をもらっとんやけんしっかりせんとね。」
と言った。
　岩城・弓削・生名は島も小さくて高い山もないので昔から飲み水に苦労していたらしい。そこで、広島の山から、おいしい水を分けてもらうようになったそうだ。いまでは上島上水道といって、海底をパイプが通って島々に豊かな水が送られている。そのお返しに今日は水源地の山に植林に来たのだった。広葉樹を植えることによって、雨水を貯めやすい森になる。落ち葉によって雨水は浄化され、ミネラルをたっぷり含んで川を流れて海に行ったり、上島へとやってくる。社会の授業で、「山は海の恋人」という言葉を習ったことがあった。山からミネラルを含んだ水が海に流れて海が豊かになっていたのに山の木が減ったので漁師さんが植林している資料があった。このように一見無関係そうな森と海。そして木と水の関係、広島の山と愛媛の島とのつながり、山あってこそぼくらはおいしい水が飲める。豊かな水があってこそぼくらは生きていける。楽しい植林は、水を通して、自然と人との関わりを知るきっかけとなった。
　その後、三回広島の福富町というところへ植林に行った。前に植えた木の成長も楽しみだった。ふかふかと水を含んだ落ち葉のクッションの道、水の流れる小川、つくしを採った時もあった。水のおかげで全てのものが生かされている。今日も遠くの福富町からこの上島においしい水が流れている。